

# 新しい教職科目「総合的な学習の時間の指導法」の構想

## A Plan of the Subject “Teaching Method for Integrated Studies”

松崎 康弘  
Yasuhiro Matsuzaki

鹿児島女子短期大学

本研究では、文部科学省「教職課程コアカリキュラム」を踏まえつつ、本学卒業の若手小学校教員の「総合的な学習の時間」（「総合」）に対する意識や、筆者がこれまで短大で実施してきた「環境教育演習」等の成果を分析して、「総合的な学習の時間の指導法」（「総合の指導法」）の内容・方法について構想することとした。若手教員の意識からは、地域素材教材化やカリキュラム・マネジメントなどの専門的な知識・技能はもちろん、彼女たちが教育現場へ総合の本質を伝えるメッセンジャーとなれるような教員養成が必要であることを論じた。筆者の実践の成果分析からは、体験的な活動の重要性が導き出されるとともに、教職課程において「総合の指導法」と他の体験的な活動を含む科目との、短大独自のカリキュラム・マネジメントが必要であることを論じた。「総合」の学びが教師としての成長にもつながることを重視して、今後、「総合の指導法」を構築していきたい。

**Keywords :** Integrated Studies, Learning by Experience, Curriculum Management

**キーワード :** 総合的な学習の時間, 総合的な学習の時間の指導法, 体験的な活動, カリキュラム・マネジメント

### 1. 研究の目的

2018年度に実施された教職課程再課程認定に伴い、幼稚園及び特別支援学校教諭を除く教員免許取得を志望する2019年度の大学入学生から、「総合的な学習の時間の指導法」（以下、「総合の指導法」）が「各科目に含めることが必要な事項」として明記された。そこで、文部科学省から科目目標が明示された「教職課程コアカリキュラム」を踏まえつつ、筆者がこれまで短大で実施してきた「環境教育演習」等の成果を分析して、「総合の指導法」の内容・方法について構想する。

### 2. 「総合的な学習の時間」に対する新人・若手教員の「困り感」

2018年度入学生まで本学では「総合の指導法」は設定されておらず、私の「生活科教育法」の講義1回分などごく限られた授業で総合については教えてきた。そのことが総合に対する新人教員の不安感を高めていたことは否めない。

本学卒業生は短大ということもあり、いわゆる現役合格とはならず、期限付き採用で県内でも地方（僻地）の学校に赴任することが多い。小規模校に赴任するケースが多いことから、新人であるが一人で学年の総合的な学習の時間（以下、「総合」）に責任を持たなければいけない者も少なくない。後述のように新人段階で総合の「（研究）主任」を任されるケースすらあり、総合に対する問題意識には切実なものがある。短大卒業後すぐの新人・若手教員でも安心感・自信をもって総合の実践に当たれるように「総合の指導法」の内容を構築する必要があると考える。

そこで、まずは2018年3月に本学を卒業して2018年度に総合を実践した新人教員を中心に、彼女たちの総合に対する「困り感」について表1に示す。「総合的な学習の時間の実践をするにあたって困ったことはないか」と質問し、回答を得たものである。なお、赴任校で低学年担任や特別支援学級担任となり総合的な学習の時間を担当していないケースも多く、量的には十分と言えるデータは得られていないが、研究の端緒として質的な検討をする。

表1 本学卒業の新人・若手教員の「総合的な学習の時間」に対する「困り感」

	教員の属性	「困り感」
A	2年目 (総合も2年目) (鹿児島市) ※今年度は「総合主任」	去年は4クラスあったので、 <u>進度を合わせることに焦っていたので、総合の時間は調べる→新聞やロイロにまとめるという授業になってしまって、あまり面白くなかった。</u> もっと子どもたちが「これを調べたい！」となるような導入がやりたかった。探検などに行かなくても体験的な活動ができればと思ったが、 <u>難しかった。</u>

B	2年目 (総合は昨年度) (熊毛郡)	昨年度は赴任したばかりで自分が島について知らなかったのが、子どもたちにすべてを教えることができなかった。子どもに質問されて答えられないことが多かった。(児童と一緒に学んでいった。) まず、自分の経験不足だし、知識不足だし、だから、本当に難しかった!
C	2年目 (総合は昨年度) (熊毛郡)	学校に赴任したばかりで <u>地域のことをあまり知らずに</u> 、総合の学習で地域の調べ学習をしなければならぬことが困りました。
D	2年目 (総合は昨年度) (熊毛郡)	1年目だと、何が見どころなのか、この生きものは何なのか、連携が大変だった。また、完成したものを置く場所を何か所かに絞ったが、そこへの連携も難しかった。(離島で直接持っていくことができなかったなど)。別の島にマップを置かせてもらったが、直接見る機会を作れなかったこと。(見た方から手紙や、見てる人を撮った写真は送っていただいた。)
E	2年目 (総合も2年目) (大島郡)	<u>教育課程に書いてあることは必ずしないとけないのか、別の方法で総合の授業を進めることはできないか、と今考えているところです。</u>
F	2年目 (総合は初めて) (大島郡)	<u>自分がしたいことがあるけど、他の先生に聞いたら、教育課程で決まっているからと言われ、どうしたらよいものかと、総合自体が悩みのタネです。</u>
G	3年目 (本採用1年目) (総合は1年目と3年目) (千葉)	5年生は米を育てています。育てるうえで必要な代掻きなどの作業がありますが…。着目する点をはっきりさせることや、調べる方法、まとめる方法を具体的に提示しないと厳しいんだと感じました。(現在の実践) 3年生の時は蚕でしたが、成長過程を知り、そこからそれぞれ関心のあるものについて調べ学習が始まるのですが、中には「関心のあるものって…」という子どももいて、関心のある事柄の範囲を広げるのが難しいなと思いました。(1年目の実践) それと、最終的な方向性の設定が難しいなと思いました。 総合、難しいです。
H	8年目 (本採用3年目) (昨年度は「総合主任」) (霧島市)	「苦勞」ではないけれど、「学年の内容に <u>系統性を持たせなければならない</u> 」「 <u>各学年の学びが繋がっていない</u> 」的なことを言われたが、正直、勉強不足過ぎて(地域のこと、人材、何を学ばせるか)よくわからず、 <u>今までの総合的な学習の内容を次年度も引き継いだ</u> 。プログラミング教育の視点をとすることで、インターネットで使えるソフトなどを調べてみたが(文科省が出しているものなど)、この学年ではこれを、と書いてある感じではなく詳細がもっとあればよいと思った。 <u>各学年の実態に応じて担任が判断した方がよい</u> と思い、発達段階に応じた使い方を示すのではなく、 <u>参考資料的な感じ</u> で示した。 もっと多くの地域の人材活用ができるとありがたいと思う。まだまだ、 <u>願っている地域の方を良く知らないというところが課題</u> 。
I	11年目 (本採用7年目) (大島郡ほか)	苦勞したところは、他教科と比べてはるかに授業の準備に時間がかかること。地域の人材ネットワークが整備されていない地域は人材を探すのに大変だった。

AからFまでの6名が2018年度に新人教員として勤務した者で、Fを除く5名が1年目から総合の実践を行った。比較対象とする意味もあり、勤務年数の異なるGからIの3名にも聞き取りを行っている。

まず目立つのは勤務校の校区(地域)に関する知識の不足を挙げる声である(B・C・D)。3月下旬にならないと赴任校が判明しないためやむを得ない部分もあるが、経験を重ねたHやIの教員も地域理解の困難さを挙げていることから、総合を実践するにあたって地域素材をどのように教材化するか、その視点を短大において私が伝えきれなかったことを示しており、「総合の指導法」において重視すべき内容だと考える。

総合において児童の興味・関心・意欲を高めることへの困り感を挙げた者もいる(A・G)。これを挙げた教員が、いずれも「調べる」「まとめる」という探究の過程に言及していることにも注目したい。総合の学習過程については理解しているものの、その具体化には苦勞しているということである。

今回、筆者としては意外だったのは(そしてある意味では嬉しかったのが)、勤務校において総合の教育課程が固定化していることへの批判の声である(E・F・H)。新人・若手であっても「これをしてみたい」「よりよい教育課程に変え

たい」と教育課程編成に思いを持つことはカリキュラム・マネジメントの大事な要素であり、教師として必要な資質であると考え、これらの回答を読んだとき、短大卒業後すぐの若者が、総合の求められる姿を学校に伝えるメッセージとなり、教育課程を改定する一員となることを意識して短大での養成を行うべきと考えた。

Aの「クラス間で進度を合わせなければならず焦った」という回答にも注目した。日本生活科・総合的学習教育学会の第25回全国大会で仙台市立広瀬小学校から示されたように、総合の実践を突き詰めると同学年でもクラスによって内容が異なることもありうる<sup>1)</sup>。この意味でも、総合の本質と最新の動向を理解し、学校現場へのメッセージとなりうる教師を養成する「総合の指導法」であるべきと考えた。

◎新人・若手教員の「困り感」から見た、「総合の指導法」に組み込むべき内容

- 地域素材を教材化する視点
- 総合の探究の過程をより具体的に理解するための知識・技能
- カリキュラム・マネジメントの重要性
- 総合の本質と最新の動向=学校現場へのメッセージになれるように。

### 3. 調査対象教員の総合に対するプラスイメージ

現職教員の「困り感」だけに基づいては、「総合の指導法」は構築できない。本学卒業生が実践を通して実感した成果、プラスイメージを学生に伝えることも「総合の指導法」の重要な役割である。そこで、前節と同じ調査対象教員に「総合をやってよかったこと」についても質問調査を行った。その内容を表2に示す。(表1と表2、後掲の表3のアルファベットが同じ者は同一人物である。)

表2 調査対象教員の「総合的な学習の時間」実践及び成果

	教員の属性	実践をしてよかった点
A	2年目 (総合も2年目) (鹿児島市) ※今年度「総合主任」	(1年目=第3学年) ○校区探検(校区を探検して新聞をつくる、社会科と似たような内容) =2年生の生活科と似たような内容だったが、その時とは違う視点で校区内を見ることができてよかった。 ○校区から世界へ(調べたい国を決めて本やインターネットを使って調べ、新聞にまとめる。) =ちょうど外国語の授業も増える時期なので、 <u>日本以外の国に興味を持ってよかった</u> 。パソコンの使い方の練習にもなった。 ○命について(助産師・獣医師の講演を聞いた後、興味をもったことについて本やインターネットで調べ、ロイロにまとめ発表する) =自分がどうやって生まれたのか、動物と人間の子育ての違いはあるかなど、命についてあらためて考えるいい機会になった。
B	2年目 (総合は昨年度) (熊本郡)	(1年目 第4学年) よかったことは多分たくさんありますよね!まず、子どもたちがいろいろな機会に「世界遺産」という言葉に敏感になったり、 <u>総合の時間以外にも学んだ言葉を出したりするようになりました</u> 。そして、いろんなことを調べるようになりましたね、きっと。今は、ネットだったり本だったりがあるって、実際に行って調べる機会が少ない中で、2回も校外学習に行って実際に自分たちの手で調べることができた。そこで <u>何か分かったときの喜びや楽しさを子どもが感じられたんだ</u> と思います。それがあってか、いろいろな機会に自分たちでいろいろなことを試したり、調べたりするようになったかも。総合だけではなく、理科の実験とかそれらの経験もあるからだとは思いますが。 それから、何よりも私自身がめちゃくちゃ屋久島について知ることができた!これはなかなかできない経験ですね。子どもたちと一緒に学びました。それらを他の職員の先生たちに伝えることができた!「こんなことした」「あんなことした」って話をしたら、周りの先生たちはすごく心配してくださるけど、環境省の方や関係機関と連携をすることで自分のはめちゃくちゃ楽しんでもらいました。 <u>関係機関との連携があったから、濃い学びを子どもたちにさせることができたし、自分も勉強になった!</u> これだけは間違いない!!

C	2年目	(回答なし)
D	2年目	(回答なし)
E	2年目 (総合も2年目) (大島郡)	(1年目 第3学年) 子どもたちなりに島の良さを生かしたお弁当を考えて、すごくいい、そしてなるほどというお弁当を考えていました。 学習発表会でも「〇〇島のこと教え隊！」という名前で劇をしました。〇〇島に遊びに来た外国人観光客と地元の人たちになりきって、話のやり取りの中で調べたことを発表しました！ また、「外国の遊びについて知ろう」では、いくつかのグループに分かれて調べました。子どもたちが外国の遊びを昼休みも楽しそうにするようになって、子どもの遊びの種類が増えてよかったなと思っています！
F	2年目	(回答なし)
G	3年目 (本採用1年目) (総合は1年目と3年目) (千葉)	(1年目 第3学年) 子どもたちのイメージとして福祉=大変でかわいそう、辛そうだな、というマイナスイメージが強くありました。しかし、福祉の調べ学習、実際に肢体不自由の方々の話を聞いたり、体験を試みたりする中で、みんな平等であり、努力を常にし続けてスポーツへ向き合う姿がかっこよく、尊敬する子どもが多くいました。また、だれにとっても過ごしやすい世の中にしていきたい！助け合いたい！という気持ちに変わっていく姿が、新聞等にまとめる中で見られました。流れとして、それぞれ興味や関心のある福祉の調べ学習をし、肢体不自由の方からの話を聞き、体験を行うことで福祉の心が育ち、福祉への理解が深まったと思います。
H	8年目 (本採用3年目) (昨年度は「総合主任」) (霧島市)	よかったところは、高専の学生ロボギャルズに出前授業に来てもらい、ロボットの動かし方などを実際に体験したことで、将来その道に進みたいと考える子や、後々、高専の文化祭を見に行った子がいて、キャリア教育につながったところ。実際に体験すると、やはり興味や関心の向き方が全然違うと思った。
I	11年目 (本採用7年目) (大島郡ほか)	やってよかったことは、地域の特色を生かした内容が多く、地域について学ぶ機会が少ない今の教育課程の中では貴重な時間となっていた。教師も総合をとおして、地域のことを学ぶことができた。ゲストティーチャーを呼ぶこともあり、地域の人材を活用できた。

CとDは質問に対して「このような実践をした」という内容面の回答のみで、Fは今年度が初めての総合の実践のためまだ回答ができないということだったので、表中では記載していない。

目立つのは、他教科等の授業や学校生活への影響に言及した回答である(A・B・E・G・H)。例えば他教科等との関連で教育内容の位置付けを考えたAは、横断的・総合的な学習であることの理解をもとに、教育課程全体を自分なりに考えたと言えるであろう。「子どもの遊びの種類が増えてよかった」とのEの回答は、幼児教育・保育についても学んでいる本学卒業生らしいと感じられた。教員経験を積んだHはキャリア教育に言及しており、教員としての視野が広がっていることが感じられる。

前節の「地域素材の教材化の視点」とも関連するが、総合の実践を通して教師自身が地域を学び理解を深めたという回答にも注目できる(B・I)。「学び続ける教師像」が提唱される中、総合の実践は教師自身の学びの場でもあるということが確認できたことは大きい。

もちろん、BやGのように、「分かった！」という喜び・達成感や、社会に参画していこうという意識など児童の成長を見取ることができたという声も、「総合の指導法」を通して伝えていきたい。

◎新人・若手教員のプラスイメージからみた「総合の指導法」に組み入れる内容

- 他教科等へ好影響を及ぼすこと(横断的・総合的な視点、カリキュラム・マネジメント)
- 教師にとっての学びの場であること
- 総合を通しての子どもの育ち

#### 4. 本学における実践から

##### (1) 調査対象教員への短大での学びの影響

前述のように本学では「総合の指導法」が存在しない(2020年度から開講)が、筆者は世界自然遺産である屋久島において合宿もして学ぶ「環境教育演習」や、日本生活科・総合的学習教育学会鹿児島支部とのコラボでフィールドワークを

行う「WE LOVE 鹿児島！」など、総合にもつながる科目を実践してきた。これらの科目を履修した卒業生に、実際の小学校での実践にどのような有効性があったかを質問調査した内容を表3に示す。なお、写真①はCやEらの回答に影響したと考えられるヤクスギランドでの観察の様子を、写真②はHの回答に登場するタンカン農園での収穫体験を示したもので、いずれも「環境教育演習」での活動である。また、表3の中でBの「よしだ自遊の森での体験」とGの「ピザ作り」は「生活」での自然体験・食育体験を、Eの「いちご狩り」は「社会」での農家訪問体験を表している。



写真① ヤクスギランドでの植生に関する学習



写真② タンカン農園での収穫体験

表3 「短大での学びが現在の実践にどのように生かされているか。」回答

	教員の属性	
A	2年目 (総合も2年目) (鹿児島市) ※今年度「総合主任」	とにかく体験が大事ということが分かったし、現場にいてもそう思う。楽しかった！面白かった！つらかった！というのが知識になるんだと感じました。あと、教えてもらうだけじゃなくて、自分で考えることが大切なんだというの。(松崎の)授業はあまり正解というものがなかったので、 <u>難しかったな</u> というのを思い出しました。体験活動は時間に余裕もないので難しいけど、子どもたちが自分で考えるというのは意識して今年は授業をしているつもりです。 <u>自分たちでひらめいたことの方が子どもたちも覚えているので。</u>
B	2年目 (総合は昨年度) (熊本郡)	何より屋久島合宿は私にとってなくてはならなかったものですね、きっと。あの時はまさか自分がここで働くとは思っていなかったけど、実際に働いて、何かの縁だったんだなってすごく思いました。 屋久島合宿やよしだ自遊の森での体験が、自分にとってすごく楽しかった。それによって、体験することの楽しさや大切さを学びました。だから、子どもたちにも教科書やビデオを見るだけでなく、実際に体験させることができている。そして、教科書やビデオを見てわかったときよりも、 <u>実際に自分で体験してわかったときのほうが子どもたちの表情や理解度はすごくいい！！</u>
C	2年目 (総合は昨年度) (熊本郡)	屋久島合宿では、やはり自然の素晴らしさに感動しました。言葉ではうまく言えませんが、やはり実際に体験したからこそ、あの感動を得られたのだと思います。子どもたちにも、 <u>勇気をもつていろいろなことに挑戦し、そこから学んでほしいな</u> という気持ちを持っています。 <u>私自身、教員をしているいろいろな体験をして学んでいる最中です。</u>
D	2年目 (総合は昨年度) (熊本郡)	自然とあんなに関わっていなかったら、こんなアイデアは出てこなかったと思う。自然の中で過ごすことの良さを学べたからこそ、教師自身が楽しみながら作ることができたと思う。
E	2年目 (総合も2年目) (大島郡)	短大の時にたくさんの経験から学んだことが多かったので、子どもたちにもたくさん経験させてあげたいなと思っています。島ということもあり、経験が限られてくるので、自分が伝えられることは伝えたいなと思い、勤務校のある島にはない松ぼっくりを鹿児島から持ってきて、一人ひとり松ぼっくりクリスマスツリーを作ったり、自分がいちご狩りしたときの動画を見せて、いちご狩りの仕方やいちごの花、いちごがどんなふうになっているのかなどを見せたりしました。

F	2年目 (総合は初めて) (大島郡)	(松崎が) その経験をさせてくれたから、生活科とかで子どものどういう気付きや発見が大切なのか、身をもって感じる事ができた。だからこそ子どもたちにも似たような気付きや発見をして、 <u>心震わせるような感動を味わわせたい</u> と思った。屋久島合宿とかを経験して教壇に立つのと同じで立つのとは、子どもに伝えたいことの熱量が違うと思う。また、そのようなことができるという、教師としての知識にもなるので、授業を受けられてよかった。
G	3年目 (本採用1年目) (総合は1年目と3年目) (千葉)	屋久島合宿では、実際に5年生の宿泊学習で行うような体験をすることができました。楽しみながら、自然の豊かさや人の温かさ、どれも忘れられない最高の時間でした。先生方や仲間と夢(早く先生になりたいな!)について話をする時間にもなりました。ピザ作りでは、仲間と協力して作るからこそ美味しい!出来上がったときの喜び!これは大人も子供も同じだと感じました。 この二つの体験から言えるのは、 <u>自分自身が楽しい!と思えるものを子どもたちにも体験させてあげたい</u> なということです。教材研究も同じだと思います。45分授業、上手ではないけれど楽しい時間に少しでもしたい!という気持ちにさせてくれた体験であったと思います。
H	8年目 (本採用3年目) (昨年度は「総合主任」) (霧島市)	4年生の社会、屋久島の自然や気候についての学習で生かした。屋久杉で作ったストラップを見せたり、タンカンをちぎりに行った写真を見せたりした。他にも、ずっと雨が降っていたこと、山の中を歩いた話など、実際に経験したことだから、自信をもって屋久島のすばらしさを話せた。だから、何でも体験してみる、行ってみる、やってみることを大切にしたいと思う。
I	11年目 (本採用7年目) (大島郡ほか)	屋久島合宿に行けたことで、社会科の授業で世界自然遺産について学んだとき、屋久島のすばらしさを伝えられた。

「環境教育演習」の教師としての実践への影響については、これまでも卒業生との対話の中で漠然とは感じていたところであるが、今回の聞き取りで文章化(可視化)できたことは大きい。

合宿あるいはフィールドワークという授業形式から、やはり体験の重要性への気付きが目立ち、「体験の楽しさ」がキーワードになっている回答が多い。その「楽しさ」を、児童の学びの楽しさへ変換している回答(A・B・C・Fなど)と、教師としての教材研究・授業研究の楽しさへと変換している回答(C・D・Eなど)とが見られた。

Cの「勇気をもって挑戦し学ぶこと」、Fの「心震わせるような感動を子どもに味わってもらいたい」「子どもに伝えたいことの熱量が違う」という回答にも注目したい。やや情緒的な表現ではあるが、子どもの「学びに向かう人間性」や教師の資質に関わる回答だと感じられた。

◎短大でのこれまでの実践から「総合の指導法」に組み入れたいこと

- 子どもにとっての体験的活動の重要性(主体的な学び、学びに向かう人間性)
- 教師にとっての体験的活動の重要性

## (2)「環境教育演習」そして「総合の指導法」のブラッシュアップに向けて

一方で、原則として屋久島環境文化研修センターの企画を学生が受講する形の「受け身的な学習」であったため、(環境教育のための)カリキュラム開発や実践技能へのつながりが不十分であるとの意識は持っていた。そのような中、2019年3月に同センターの幼児環境教育推進事業「屋久島こども森の遊び場～テント de わくわくキャンプ」(国立青少年教育振興機構「子どもゆめ基金助成活動」)(以下、「わくわくキャンプ」)へ学生ボランティアを紹介してほしいとの依頼があり、「環境教育演習」を受講していた5名の学生を参加させることとした。

「わくわくキャンプ」は3月2日・3日の2日間の日程で幼児・小学生と保護者を招いて行われ、学生にも企画の一部(初日の「葉っぱ de ベタベタ」と「夜のお話し会」、2日目の「室内遊び」)の計画・実施が割り当てられた。研修センターの企画時には学生が子ども・保護者のサポートに回った。実際にどのような企画を行うかは、前日の3月1日に研修センター職員・関係者による環境教育に関するレクチャーを受けた上で学生たちが話し合った(写真③)。

表4 「わくわくキャンプ」スケジュール (抜粋)

○3月1日(金) 事前準備
10:00 宮之浦図書館にて事業に使用する絵本を探索(～10:40)
11:30 センターにて職員による環境文化村構想・幼児環境教育についてのレクチャー 学生による事業プログラム(森の遊び等)作成(～15:30)
18:00 プログラムミーティング(～21:30)
○3月2日(土) 環境教育推進事業「テント de わくわくキャンプ」 第1日
10:00 プログラム開始(アイスブレイク, テント設営, フラッグ製作を学生が補助)
13:00 学生によるプログラム(絵本の読み聞かせ, 落ち葉でスタンプ遊び)(～15:00)
15:30 センターによるプログラム(火起こし体験, ピザ作りなど学生が補助)(～19:40)
21:00 学生によるプログラム(夜の絵本お話し会)(～21:20)
○3月3日(日) 環境教育推進事業「テント de わくわくキャンプ」 第2日
7:00 プログラム開始(テントの撤収を学生が補助)(～7:30)
9:10 学生によるプログラム(幼児体操, ごっこ遊び, 昔遊び)(～9:50)
10:00 センターによるプログラム (昆虫講座, 屋久杉自然館見学, 屋久杉木工クラフトを学生が補助)(～14:50)
15:10 保護者と学生との振り返り(松崎, センター職員同席)(～16:00)
16:30 学生とセンター職員との振り返り(～17:40)



写真③ 学生による付箋を用いた企画話し合い



写真④ 「葉っぱ de ペタペタ」



写真⑤ 学生による読み聞かせ



写真⑥ 室内遊び(幼児体操・ごっこ遊び)

「葉っぱ de ペタペタ」は研修センター周辺の落ち葉などを収集し、それらに絵の具を付けて画用紙上で自由な表現をする活動である(写真④)。読み聞かせについては、自然に親しむことをテーマに絵本を選択し、子どもたちを集めて実行した(写真⑤)。ごっこ遊びについては、本来のプログラムが雨天中止となったため、急遽当日の朝15分の話し合いを経て実行された(写真⑥)。

以下に、表5として参加学生の一人<sup>2)</sup>の感想を示す。

表5 「わくわくキャンプ」参加学生感想

①葉っぱ de ベタベタ	<p>自分たちで活動を企画して進めたものであるため、とても反省点が残りました。各家庭、子どもだけでなく、保護者の方にももっと言葉かけしたら良かったです。活動の進め方も戸惑うことが多く、ご迷惑をかけてしまいました。活動を無理して行われていないかなどマイナスなことばかり考えてしまい、焦った部分もあります。しかし、ゆっくりと活動を振り返ると、嬉しそうに葉を選んだり、色の変化を感じたり、うまく葉脈を出せるように工夫する姿もあったとわかりました。<u>私たちが考えた企画で親子の楽しい時間が創り出せたら幸せだと思いました。5人で連携したからこそ、製作したり遊んだりする活動を進められました。不安もいっぱいでしたが、とても勉強になる時間でした。</u></p>
②アウトドアクッキング／火おこし	<p>包丁を正しく使えるよう、保護者の方が教える姿がありました。<u>このような機会だからこそチャレンジできるのだという声も聞いて、キャンプの中で子どもが初めて経験する姿を見られたのはうれしかったです。</u></p> <p>火おこしでは、<u>正解を教えず、親子で試行錯誤しながら取り組む姿</u>が印象的でした。また、メタルマッチで火を付けようと頑張る子どもの姿がかわいらしかったです。その中で、<u>どうやったら火がつくか考える子どもの姿</u>があって、<u>なかなかつかないメタルマッチも考える力を養う環境なのだと思います。</u></p>
③夜のお話し会	<p>ここでは絵本を読ませていただきました。キャンプということもあり、雰囲気を出すために部屋を暗くして行いました。その環境はいつもと違うため、子どもたちがワクワクしている様子が伝わってきました。絵本を読んでいるときも、集中して見てもらったのでうれしかったです。</p>
④2日目の活動をとおして	<p>何もかもが初めてで、戸惑ってしまうことが多くありました。しかし、<u>ご家族の温かさにたくさん助けていただきました。活動では、みんなで考えて企画したものが形になっていくのが素敵なことだと改めて思いました。</u></p>
⑤突然の!!!ごっこ遊び	<p>雨天のため、急遽プログラムを企画することになりました。4人の仲間がいたから、何とか案を出して実行することができました。15分でダンスを覚えて、子どもや保護者の前で踊るのは初めてでした。変身ごっこではいろいろなものになりきって遊びました。<u>短大での保育内容(表現)の授業がとても生かされた時間だったと心の底から思います。</u></p> <p>そして、あんなに白熱した花いちもんめは今までにありません!もしかしたら4歳の子どもにはルールが分からないままだったかもしれません。大人の方がワクワクしていたような気がします。でも、その雰囲気が子どもに伝わって、<u>みんなが笑顔になる瞬間は素敵だな</u>と思いました。</p>
⑥研修センター職員による昆虫クイズ	<p>昆虫の不思議や意外な関係性などを知ることができました。世界最大級のカブトムシ「ヘラクレスオオカブト」に子どもとお父さんが興奮しているのが印象的でした。「カブトムシは男の子のあこがれ」だそうです。先生になったら子ども達に自慢したいと思います。</p> <p>研修センターの中で行えることを企画、<u>対応する職員の方々の姿から学ぶことも多くありました。自分の特技を生かして伝えていく力も身に付けていけたらよい</u>と思いました。</p>
⑦2日目・3日目のふりかえり(保護者を交えて)	<p>ここでは、キャンプの間お邪魔した家族の保護者の方とお話ししました。たくさん<u>伝えたいことはあるのに上手く言葉にできずに、その場で伝えられないもどかしさ</u>を感じました。もっと「良いと思った子どもの姿があった」「ステキな親子の姿があった」と後悔しました。</p> <p>しかし、この経験はとても貴重だったと思います。子どもは親と先生など様々な大人に影響を受けながら成長していきます。保護者から「今まで見たことのない子どもの姿を見ることができた」という言葉をよく聞きました。<u>子どもを中心として、共に支えていける連携をとることが大切だとあらためて実感</u>しました。</p>
⑧3日目の活動をとおして	<p>対応力を学んだ1日だった気がします。急な変更に対応できるような知識や技術は欠かせないと思いました。また、協力して乗り越えられたので、一人ひとりの力を合わせて発揮することができたのは自分自身の成長にもつながりました。</p>



## ⑨今後の進路にどのように役立ちそうか

一つ目は、「環境教育とは？」ということについて考え、学びました。子どもが成長するのに環境は大きく影響し、大人はその環境をつくる要因になるのだと感じました。自然という環境から学べることは多く、主体性や思いやりなどが見についたという保護者の方からのお話も聞くことができました。今後、教師として子どもに思いやりの心を持ってもらえるように、センスオブワンダーを大切にしたい関わり方がしたいと思いました。

二つ目は、保護者との関わりです。親子で参加している場でどこまでは言っているのか不安な部分が最初にはありました。しかし、保護者の方が温かく声をかけてくださり会話をする中で、子どもの話題になったときに、この瞬間は大切だと思いました。全然上手く伝えることができなかつたし、気付けなかつた良いところもたくさんありました。子どもの環境をより良くするために保護者と先生の連携が大切だというのはこのことなのだと感じました。今後、保護者対応をする際にも協力する楽しさを大切にしていきたいです。

三つ目は、対応する力です。スタッフの方から学んだこともありましたが、自分自身が経験することで身についた部分もあります。力不足を強く感じて悔しい思いもありました。しかし、周りの皆さんのたくさんの協力があつて活動を進めました。何かをしようと心から伝えようとするので楽しい空間ができるのかなと実感しましたその場で対応できる引き出しも多く持っていたと思います。

まず目立つのは、他の4名の学生との協力によって企画を成し遂げた達成感である。(①④⑤)これまでの短大の科目でもグループワークによる模擬授業などを取り入れてはきたが、やはり現実の子ども(と保護者)のために企画を作るという切実感・必要感が違うのだらうと感じた。現実の課題に即した「対話的な学び」の重要性を教師になる直前に実感できたことは大きいだろう。

⑤の、短大での既習事項を目の前の課題解決に結びつけた経験も、彼女が教師になるにあたり大きな意味を持ったと思う。様々な教科・領域等の学びが目前の課題解決に役立った実感を持ってたことで、横断的な学習の構築、ひいてはカリキュラム・マネジメントに積極的に取り組めるようになるのではないかと考える。⑨に「思いやり」という道徳的価値を示すキーワードもあり、教育の総合性に心を向けてくれたと感じられる。

試行錯誤を通して思考力を発揮する子どもの姿を見た経験(②)、地域の人材を活用することにより子どもはもちろん教師にとっても深い学びができると実感した経験(⑥)も、総合を実践するにあたって重要な点の理解につながったであらう。

そして、今回大きかったのは、子どもと共に保護者がおり、活動だけでなくふりかえりも保護者とできたことである。現役学生にはややもすると「モンスターペアレント」のイメージがあり、短大の通常の授業において保護者と接する機会もほとんどないため、保護者との連携のイメージがつきにくいのではないかと考えている。「地域に開かれた教育課程」という点からも、保護者や研修センター職員とともに活動を創り上げ、振り返りまでできた経験は、彼女が教師として総合の実践を構築するための貴重な原体験になったと確信している。

このような体験的学習を直接「総合の指導法」に組み込むことは容易ではない。実際には教科と総合との関係のように、「総合の指導法」と「環境教育演習」や教育活動の企画・運営とを関連付けて、短大自体のカリキュラム・マネジメントを進めていくことが重要である。

## ◎「わくわくキャンプ」の成果から「総合の指導法」に組み入れたいこと

- 現実の課題に即した「対話的な学び」の実感
- 既習事項を結びつけることの重要性の実感
- 保護者や地域人材とともに総合を創り上げることの重要性

※体験的学習を行う他の授業科目と関連を図る、短大自体のカリキュラム・マネジメントが必要。

## 5. 「総合の指導法」の構想

「教職課程コアカリキュラム」に示された「総合の指導法」の目標は以下のとおりである<sup>3)</sup>。

総合的な学習の時間の指導法	
全体目標：	総合的な学習の時間は、探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力の育成を目指す。各教科等で育まれる見方・考え方を総合的に活用して、広範な事象を多様な角度から俯瞰して捉え、実社会・実生活の課題を探究する学びを実現するために、指導計画の作成および具体的な指導の仕方、並びに学習活動の評価に関する知識・技能を身に付ける。
(1) 総合的な学習の時間の意義と原理	一般目標： 総合的な学習の時間の意義や、各学校において目標及び内容を定める際の考え方を理解する。 到達目標： 1) 総合的な学習の時間の意義と教育課程において果たす役割について、教科を越えて必要となる資質・能力の育成の視点から理解している。 2) 学習指導要領における総合的な学習の時間の目標並びに各学校において目標及び内容を定める際の考え方や留意点を理解している。
(2) 総合的な学習の時間の指導計画の作成	一般目標： 総合的な学習の時間の指導計画作成の考え方を理解し、その実現のために必要な基礎的な能力を身に付ける。 到達目標： 1) 各教科等との関連性を図りながら総合的な学習の時間の年間指導計画を作成することの重要性と、その具体的な事例を理解している。 2) 主体的・対話的で深い学びを実現するような、総合的な学習の時間の単元計画を作成することの重要性とその具体的な事例を理解している。
(3) 総合的な学習の時間の指導と評価	一般目標：総合的な学習の時間の指導と評価の考え方および実践上の留意点を理解する。 到達目標： 1) 探究的な学習の過程及びそれを実現するための具体的な手立てを理解している。 2) 総合的な学習の時間における児童及び生徒の学習状況に関する評価の方法及びその留意点を理解している。

このコアカリキュラムの内容とこれまで掲げた「総合の指導法に組み入れたいこと」を照合したい。

「総合の指導法」に組み入れたいこと（再掲）

- ①地域素材を教材化する視点
- ②総合の探究の過程をより具体的に理解するための知識・技能
- ③カリキュラム・マネジメントの重要性
- ④総合の本質と最新の動向＝学校現場へのメッセージになれるように。
- ⑤他教科等へ好影響を及ぼすこと（横断的・総合的な視点、カリマネ）
- ⑥教師にとっての学びの場であること
- ⑦総合を通しての子どもの育ち
- ⑧子どもにとっての体験的活動の重要性（主体的な学び、学びに向かう人間性）
- ⑨教師にとっての体験的活動の重要性
- ⑩現実の課題に即した「対話的な学び」の実感
- ⑪既習事項を結びつけることの重要性の実感
- ⑫保護者や地域人材とともに総合を創り上げることの重要性

コアカリキュラムの「(1) 総合的な学習の時間の意義と原理」には④を反映させたい。学生自身が総合の意義をきちんと理解し、勤務校へのメッセージの役割を果たして総合の教育課程の硬直化を防ぐということを目指していきたい。

コアカリキュラムの「(2) 総合的な学習の時間の指導計画の作成」には③⑤⑪を、実感を伴った学びとして反映させたい。

コアカリキュラムの「(3) 総合的な学習の時間の指導と評価」には①②⑦⑩⑫を反映させたい。やはり実感を伴った

学びとするために、模擬授業には困難も伴うが、「わくわくキャンプ」のような諸体験や他科目での学びとも結びつけて、短大としてのカリキュラム・マネジメントもしていきたい。

そして、「総合の指導法」のまとめには⑥⑨をふまえて、総合の学びは教師としての成長にもつながることをしっかりと伝えたい。

## 6. おわりに

今後は、調査対象となる本学卒業生の範囲を広げ、教師としての成長段階を踏まえて短大教員として何ができるかを、リカレント教育の在り方も含めて考察していきたい。

また、2020年度から「総合の指導法」を実施するので、今回と同様の研究を2021年度以降に行い、その成果と課題を分析していきたい。

さらに、他大学において「総合の指導法」がどのように行われているかの情報交換を進め、相対的な研究としていきたい。

## 註・引用文献

- 1) 仙台市立広瀬小学校は2013年度より第3学年で「学級カリキュラム」を先行実施している。(『平成28年度日本生活科・総合的学習教育学会 第25回全国大会宮城大会 発表要旨集』pp.38-39.)
- 2) 当該学生はこの活動の翌月である2019年4月より大島郡の小学校に勤務し、第3・4学年の複式学級の担任を務めている。
- 3) 文部科学省初等中等教育局教職員課『教職課程認定の手引き(教員の免許状授与の所要資格を得させるための大学の課程認定申請の手引き) 平成31年度開設用 再課程認定』(2018年最終更新) p.134

## 参考文献

- 文部科学省『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 総合的な学習の時間編』(2017年, 東洋館出版社)
- 中野真志・加藤智編『生活科・総合的学習の系譜と展望』(2018年, 三恵社)
- 野田敦敬「自立への基礎を養う生活科, 地域への愛着を深める総合的学習」(日本生活科・総合的学習教育学会誌『せいかつか&そうごう』第25号, 2018年, pp.4-7)
- 後藤竜太「総合的な学習の時間を書くとしたカリキュラム・マネジメント —全ての教職員で取り組むための方策—」(日本生活科・総合的学習教育学会誌『せいかつか&そうごう』第26号, 2019年, pp.16-27)

(2019年11月26日 受理)